

I Tは自立的技術進歩？

大阪大学教授 林 敏彦

あるシンクタンクの人との話である。

「I Tブームでさぞ忙しいでしょう。」

「それが、大変なんです。」

「え？儲かって笑いが止まらないのかと思いました。」

「とんでもありません。最近では、自治体からの仕事は細切れの上競争入札なので、まったく利益はとれません。それにI Tは啓蒙の時代を過ぎて事業の段階に入りましたが、われわれのところは商売が下手ですから。」

「ではI Tで受けに入っているところはあるんですか。」

「さあ、どことも苦しいのではないですか。」

「メーカーはどうなんですか。」

「ハードは競争が厳しいので値段が安くなってとても利益どころではないでしょう。それに、自治体と組んだ研究開発で国の助成金を受けようとしても、16億円の予算申請が9億円で査定されたという話もあるくらい厳しいですよ。そうなったからといって降りるわけにもいかないし、当然自治体にお金があるわけではないので、結局中心となるメーカーが負担をかぶるしかない。最近では国のプロジェクトも3割ほどのお

金を出して10割ほどの仕事を求めるというものが多いですから。やればやるほど損失が重なるばかりです。」

「通信事業者はどうですか。」

「これも通信料金の値下げばかりでキャリアはどこも苦しいでしょう。」

「システム・インテグレーターは？」

「儲かって笑いが止まらないというところはあまりなさそうですよ。通信関係では、ドコモの独り勝ちといったところですかね。」

あ、それと今、放送関係は結構いいようです。例のマイラインの話で、顧客の囲い込みを目指して通信事業者は猛烈なキャンペーンを打ってますから、放送、新聞、雑誌など広告業界は特需が発生しているみたいですよ。でも、これも今年限りですね。来年にはパタッと需要がなくなりますよ。インターネット・モールもそれほど儲からないと言うし、I Tで日本経済が回復するというのは話が逆で、日本経済が回復すればI T関連にも利益が出る、ということじゃないですか。」

それでもI T革命は進んでいく。革命とは何か。ブルジョア革命は貴族の政治的、経済的特権をブルジョアに移転した。農地改革は不在地主の土地所有権を小作人に移

転した。奴隷解放は奴隷という人的資産の所有権を奴隷の主人から奴隷本人に移転した。宗教改革は教会の特権を信者に移転した。だから既得権益の大規模かつシステムティックな再定義あるいは移転が革命の本質なのだろう。

だとすれば、今、確かに革命が進行している。組織内で情報のゲートウェイの役割だけを果たしていた中間管理職は職を失い、既存の商取引関係は破壊され、行政情報の奥の院は白日の下にさらされることになり、政治家の行動はすべてガラス張りとなり、学者も情報だけでは勝負できなくなる。誰もそれほど儲からないまま大きな変化が進んでいく。

しかし本当は広く薄く利益は拡散している。組織、しごと、製品、市場、産業が変化し、人間関係、暮らし、教育、文化、思想、政治、行政のあり方も変わっていく。これが経済学者が自律的技術進歩と呼ぶところのものなのだろうか。

『行政 & A D P』2001.4 Vol.37 随想